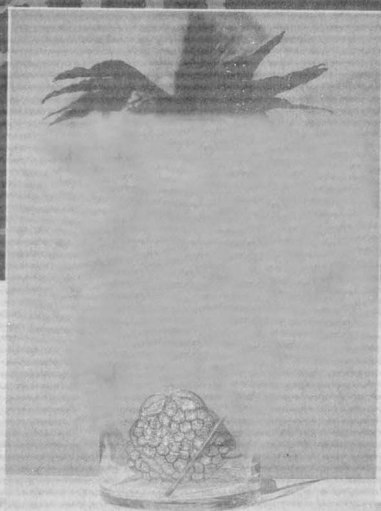


Marie-lou's dream

TAKAKAZU HORIUCHI

Marie-lou's dream and my summer



河出書房新社

マリールー、夏

一九九三年六月一五日 初版印刷
一九九三年六月二五日 初版発行

著 者 堀内貴和

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 営業 ○三―三四〇四―一二〇一
編集 ○三―三四〇四―八六一一

振替口座(東京)〇―一〇八〇二

印刷 三松堂印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

定価はカバー・帯に表示してあります

© 1993 Printed in Japan

ISBN4-309-00845-3

堀内貴和(ほりうちたかかず)
一九六〇年東京生まれ。雑誌編集にたずさわりながら小説を書きはじめ。著書に『ラインハルトに会いたい』(東京書籍)『結婚からはじまる』(PHP研究所)など、訳書に『胸いっぱいのロックンロール』(マガジンハウス)などがある。

目次

クラス会の後	5
港街の夜風に	24
サマースーツを着た日	42
ピンク・ドラゴンの爪	62
紫陽花は、語りはじめる	77
ムーンライト・ウォーク	96
チャイナ・シンバルを叩く	116
浴室の時間	125
夢をつむぐ	147
ハーブ・オムレツの朝	170

写真 * Beatrice A. Rumi
装帧 * 保田 薰

マリールー、夏

クラス会の後

時々、ガクンという軽い衝撃があった。巨大な旅客機は、荒れた気流のなかを通過しているのだ。ぼくは、目を閉じた。上昇しているのにもかかわらず、どこまでも落ちていくような、不安な感触があった。

やがて、衝撃の回数は減り、水平飛行に入った。目を開けたのとは同時に、ベルトと禁煙のサインが消えた。

ギャリーの壁に埋めこまれたテレヴィ・モニターの画面で、テレヴィ・ドラマが上映されはじめた。かなり昔のドラマのようだ。昭和三〇年代の後半だろうか。最近亡くなった男優が、主役で登場しているのだ、としばらく観ていて、気がついた。

ぼくは、イヤフォンをつけた。角ばった硬い感じの台詞が、流れていた。ふくらみを持ちつつも、切れのあるいい日本語だった。かつて、どこかで体験したことのあるしっとりとした時が、映像のなかで、静かに流れていた。台詞のリズムの心地よさに身をゆだねていると、浅い眠りに落ちた。

目を開いたとき、飛行機は着陸態勢に入っていた。一時間と少しの飛行時間など、ほんとうにあつと言う間だ。軽いショックがあり、飛行機のタイヤが新千歳^{ちとせ}空港の路面をとらえた。

夕方のまだ早い時間なのだが、窓から外をのぞくと、なんとなく暗い。雨のようだ。

すでに映像の終了した機内のテレウィ・モニターの上にあるパネルに、東京と札幌の気温が、数字で示されていた。札幌の気温は、摂氏一八度。東京よりも一三度以上も低い。

北海道におり立つのは、高校を卒業して以来のことだ。三年半ぶりということになるのだろうか。

ベルトを外して立ち上がると、ほかの乗客たちとともに機体から吐き出された。空港のロビーは、夏の観光客でいっぱいだ。

新千歳空港に乗り入れているJ・Rに乗り、札幌に出た。空港も、札幌の駅も、ぼくがいたころとは、かなり様子が変わっていた。あたり前にこぎれいになってしまったのだ。

駅から、タクシーに乗った。大野敦^{あつし}の仕事場に向かうのだ。高校時代を通じて、一緒にバンドをやっていた彼は、その当時いちばんの友人だった。大野は、北海道の大学に入り、獣医になるための勉強をしている。夏休みの今は学外実習で、郊外の動物病院で働いている。

北海道に滞在する間、ぼくは彼の家に世話になる。ホテルにでも泊まればいい、と思っていたのだが、彼がぜひうちにこい、と言ってくれたのだ。

高校生の三年間、両親とともにぼくは札幌の市街に住んでいた。父親の仕事のせいで、ぼくたちの家族は、ひとところに長い時間住むことが、あまりなかった。ぼくが生まれてからは、札幌の三年間がいちばん長い。今、両親は、香港にいる。

小雨の降るなかを、タクシーはスムーズに走った。老年の運転手のおっとりとしたしゃべりかたが、妙になつかしい。

病院はすぐに見つかった。緑色の外壁の、一見は高原のペンションみたいな建物だった。

タクシーをおりて、ぼくは待合室に入った。動物病院は盛況のようだ。猫や犬の鳴き声で、にぎやかだ。動物たちの声をきいたとたんに、鼻のなかがむずがゆくなった。ぼくは軽い猫アレルギーなのだ。間近に猫がいるとこんな程度ではすまない。

受付にいた白衣を着た中年の女性に、大野さんはいますか、と言うと、彼女は、

「大野くん」

と、甲高い声で呼んだ。

やがて、手術着のような淡いグリーンの服に身を包んだ大野敦が姿を現した。

「よう」

と言って、長身の彼はぼくの肩を叩いた。

ときどき連絡はしていたものの、逢うのは、三年半振りだった。

彼は、高校のときより、ひとまわり^{かつぶく}恰幅がよくなっていた。

「きつと、もうすぐ先生と呼ばれるようになるんだな」

と、ぼくが言うのと、

「うちの大学の獣医科を卒業するには、人食い熊と相撲をとって勝たないといけないんだ。まだ腹の出かたが足りんだろう？」

と、大野はおどけて言い、自分の腹をたたいた。ユーモアのセンスは衰えていないようだ。

「あと、注射一本打つのに立ち会えば、今日は終わりなんだ。末期ガンの犬にモルヒネを打って楽にしてやるんだ。待っていてくれ」

ほんとうか嘘かわからないことを言い残して、大野は診療室に姿を消した。

注射一本、と彼は言ったけれど、それから一時間近く、ぼくは待合室で待たされた。おかげで、待合室に置いてあった北海道の月刊アウトドア雑誌を、すみからすみまで読むことができた。

ジーンズに、紺色のスウェットシャツに着がえた大野と一緒に、ぼくは動物病院を出た。半地下の駐車場にとめてあるシルバー・メタリックのフルタイム4WDのセダンに乗りこむと、大野はフーと息を吐きだした。

「忙しいのか？」

と、ぼくはきいた。

「動物病院というのは、まったく殺人的な場所だ。明日から三日間の休みは、なんとかもぎ取ったがな。おまえのほうはどうなんだ？」

「暇だよ」

「就職は？」

と、彼はきいた。

ぼくは、東京の私立大学の四年生だ。このままいけば、来春には卒業して、なにかしらの仕事に就くことになる。

「決まったやつらもいるよ。けど、おれはまだだ」

「のんきだな」

「たしかに。ほんとうは、北海道でふらついている場合じゃないんだ」

「おまえもこれから勉強して、獣医になれ。働き口はおれがなんとかしてやる」

「ばか言え」

と言って、ぼくは笑った。大野はぼくが猫アレルギーなことを知っていて、そんな冗談を飛ばしているのだ。

大学では、工学部電気工学科の高電圧工学のゼミに、ぼくは籍を置いている。そんなふうにいるときこえはいいのだが、四年生になってから、ほとんど勉強らしいことはしていない。きのう、ぼくはふらっと研究室に顔を出した。すると、ゼミの教授がいて、部屋にくるように言われた。就職のことで彼は、ぼくに説教した。きみは成績がよくないのだから、もっと積極的に先輩のいる会社をたずねないといけない。さもないと、就職浪人する羽目になる、云々。彼の幹旋で、北海道から戻ったら、ある電気メーカーを、ぼくは訪問することになる。そのことを考えると、なんだか憂鬱だ。

「音楽はやっているのか？」

車を発進させながら、大野がきいた。

「ああ。勉強よりはずっと熱心にやっている」

大学の軽音楽部で、ぼくはドラムスを叩いている。

「高校のときの音楽仲間で、まだやっているのはおれとおまえくらいなもんだぞ」

「テナーは、吹いているか？」

と、ぼくはきいた。

大野は高校のころ、テナー・サクソフォンを吹いていた。

「三年生のころまでは、わりと真剣にやっていたんだが、このところはあまり楽器にさわっていないな。今夜は、うちでメシ食ったら、『バタイユ』に行こう。原田さんが、おまえに逢いたが

つていた」

「なつかしいな」

と、ぼくは言った。

故郷と呼べる場所のないぼくが、そんな気持ちになるのはめずらしい。

『バタイユ』は、ぼくたちが高校のころたむろしていたジャズ喫茶だ。札幌出身で、かつては東京でプロのテナーマンとして活躍していた原田重夫という人がやっている。原田さんは、大柄で見るからに男っぽい、はっきりとした性格の人だ。テナーを激しくブローさせる。ぼくたちはその店でレコードを聴きあさり、原田さんから演奏の手ほどきを受けたものだ。

ごくたまに、季節の便りのようなものを書いたことがあるくらいで、原田さんにも卒業以来逢っていない。ぼくは、原田さんがいつも着ていたアロハシャツのことを思い出した。

郊外にある大野の実家で、ぼくは大歓迎を受けた。

大きな木造の二階建てだ。必要な部分にはしっかり手間をかけた古い家で、居心地はとて面白い。高校のときも、ぼくは幾度となく彼の家に泊まって、レコードを聴いては語りあかした。

小柄で、しぐさに古風なところのある大野の母親が、北海道ならではの海の幸を次々と出してくれた。食べきれぬ量ではなくて、ぼくは降参してしまった。

食事のあと、大野の部屋で、高校の卒業アルバムを見た。そのアルバムを、ぼくは久しぶりに見た。ぼく自身も持っているはずなのだが、どこかにやってしまった。

サークルを紹介するページの、『軽音楽研究会』の集合写真に、ぼく、大野敦、前田次郎、斉

藤瑞枝が並んで写っていた。その三人は、ぼくにとって親友といっていい人たちだ。三年間、クラスも同じだった。ぼくをふくめて、写真のなかでみんな一緒に緊張した表情をしていた。

今、前田は京都に、瑞枝は仙台にいる。前田はよく同様大学生だ。ぼくとは違い、高校のころから秀才であった彼は、きちんとした意志を持続させ、物理学の勉強をしている。来年からは、アメリカの工科大学に留学することになるだろう、と春さきにくれた手紙に、前田は書いていた。斉藤瑞枝はすでに働いている。洋服のボタンナーの仕事を、瑞枝はしているのだ。高校を卒業すると、彼女はすぐにそのための学校に入学した。二年間通って、去年から仕事に就いているのだ。小さな会社なので、仕事の幅はこのところボタンナーだけにとどまらず、多方面にのびてきているのだという。

ふたりとも、明日の午後、クラス会に間に合うように、札幌に戻ってくるはずだ。

アルバムを見たあと、ぼくと大野は札幌の街に出た。大野の家から繁華街までゆっくり歩いて二〇分ほどだ。

街の様子も、やはりそうとうに変わってしまっていた。ひとりですべて歩いていたら、あるいは迷っていたかもしれない。

『パタイユ』のある雑居ビルにたどりつき、エレヴェーターに乗っていると、ぼくは一瞬だけ、むかしに戻った気持ちになった。

八階で、ぼくたちはエレヴェーターをおりた。傷だらけの木のドアを開けると、店のなかはほとんど変わっていないかった。

バンドスタンドには、ベビー・グランドとウッド・ベースがあった。アルテックのスピーカー

や、古いマッキントッシュの真空管アンプも、健在だった。

原田さんは、すこし雰囲気が変わっていた。ぼくが高校のころは、彼はフワフワのカーリーヘアだったのだけれど、今では髪を短くして、ごく自然にわけていた。白髪も目立ってきている。彼は五〇歳をいくつか過ぎてはいるはずだ。しかし、アロハシャツを着ているのは、かつてと同じだった。夏でも冬でも、季節を問わず、原田さんは一年中アロハシャツを着ていた。彼のトレードマークだ。プロのテナーマンだったころは、『アロハの原田』で通っていたのだという。

F Mラジオが控えめな音量で流れていて、カウンタートとテーブルの席にいた数人の客は、全部女性だった。むかしは、客といえはむくつけき男ばかりで、女性の客は瑞枝くらいのもだった。「おう、よくきたな」

ぼくの顔を見ると、根っからの北海道人らしく語尾をゴムチューブのように引っ張って、原田さんは言った。声は、酒と煙草で噎^かれている。

「卒業以来です」

と、ぼくは言った。

「あのころは、毎晩セッションしていたっけな」

「このごろ、テナーは吹いていないのですか？」

店の奥にはバンドスタンドがある。ベビー・グランドのかたわらに、原田さんのテナーがスタンドにたてかけてあった。有名なアメリカの黒人のミュージシャンから譲り受けたという、そのアメリカ製のセルマーは、原田さんの自慢のたねだ。

「あんまりだな。セッションやる人も、少なくなった。バンドといえば、高校生や中学生のロッ

クバンドと相場は決まっているんだ。東京はどうだい？」

「ジャズをやる人は、少ないです」

「やっぱりそうか」

原田さんは、膨大な量のレコードが並んだ棚のところへ歩いていき、一枚のレコードを抜き出した。

盤を抜き出し、ターンテーブルにのせると針を落とした。アンプのセレクトレバーを切り換えると、やがてレコードの音が聴こえた。ぼくが、よく聴かせてもらったマックス・ローチのリーダールバムだった。

「うわ！」

「昌彦は、このワルツのリズムを懸命にコピーしていたっけ」

と、大野が言った。

昌彦とはぼくのことだ。中川昌彦という。

「最初はうまくリズム・キープできなかったのだけれど、ある日目がさめると、体のなかからそのリズムが聴こえてくるんだ。それから、ほとんど無意識のうちにリズム・キープができるようになった」

「おまえらの演奏を、久しぶりに聴きたいな」

と、原田さんが言った。

「明日の夜、ここでジャムろうよ。瑞枝と、次郎もまじえて」と、大野が言った。

「おう、それがいい」

と、原田さんが言った。

「しかし、ドラムスが——」

と言いかけて、ぼくは口をつぐんだ。

店にはドラムスがなかった。かつてはあったのだ。国産の安物だったが、音は悪くなかった。いつだったか、ぼくたちが店にいるとき、ちょっとした事件があった。その日は、夕方から原田さんは酔っていた。原田さんは、酒が入ると荒れることがあり、よく喧嘩をした。あのときも、客の男と喧嘩をした。原因はよくおぼえていないが、チャーリー・パーカーのアドリブの手法に對する意見の違いとか、そういうたぐいのことだったような気がする。

口論から、やがてつかみ合いの喧嘩に発展した。原田さんが、男の胸ぐらをつかんで、思いきりつき飛ばした。男の体がドラム스에倒れこんだ。何枚ものガラスが一度に割れたような、すごい音がした。

タムタムのホルダーが折れて、バス・ドラムの胴に食いこんでしまった。シンバル・スタンドが曲がり、古いライド・シンバルがぼっくりと割れた。ぼく、大野、前田の三人で、なんとか原田さんをおさえこんだ。原田さんは大柄で驚くほど力があるから、三人がかりでもやっとだった。ぼくはそのとき原田さんの肘打ちをまともに食らって、鼻血を出した。

その翌日行ってみると、ドラムスがなくなっていた。きくと、まとめて捨ててしまった、と原田さんは言った。

「あのときは、昌彦に悪いことをした」